

「加藤周一文庫」と加藤周一の方法

鷲 巢 力

「1」加藤周一の遺した蔵書・ノート・資料

「書いたものが少しある」

加藤周一は二〇〇八年二月五日に亡くなる。その七カ月前に大腸のポリープを除去するために入院した。三十数年の長きにわたり加藤を支えつづけた矢島翠から、加藤の歿後に伺った話なのだが、その検査のときに胃がんが発見され、すでに化学療法も放射線療法も外科手術もできなく、手の施しようがないことを医師に告げられたという。

それでも加藤は「そんなにたちの悪いがんではない」といった。しかし、医者だった加藤は自分の余命がどれほどか、おおよそ見当をつけていたはずである。

それから三カ月ほどたった八月のある日、加藤宅を訪れると「書いたものが少しある」と告げられた。何が、何処にあり、それをどうして欲しいかなど、詳しいことはいっさい何もいわれなかった。ただ「書

いたものが少しある」といっただけである。うかつにも、おおかた未発表原稿があるということか、それを刊行してほしいということだろう、と私は推測した。

加藤が亡くなり、お別れの会（二〇〇九年二月）などが済んだころに、矢島からある相談を受けた。矢島は、加藤が遺した著書、それに蔵書や資料類について、ふたつの望みをもっていた。ひとつは、これらの散佚を防ぐために、どこかに一括して受けいれてもらいたいこと。もうひとつは、一定の条件が課せられるにせよ、これらを市民にも閲覧できるようにしたいこと。このふたつの条件が満たされれば、すべてを無償提供する。然るべき受けいれ先を探してほしいという相談だった。

加藤は生粋のアカデミーの人ではない。アカデミーとジャーナリズムのはざままで自らの仕事を営んだ。しかも、日本の大学で教鞭を執ることが少なかった。したがって、いわゆる「教え子」とか「弟子」といわれる人たちが、とりわけ日本にはいなかった。アカデミーの人な

らば、学統に連なる人たちが責任をもって、遺された蔵書や資料やノート類を処理するだろう。だが、加藤にはそういう人がいなかった。加藤との公私にわたる付き合いが四十年に及び、たまたま晩年近くに『加藤周一自選集』（岩波書店）の編集を加藤とともにしていた関係で、矢島も私に依頼しやすかったのだろう。もろもろの条件を考えあわせると、引き受けないわけにはいかなかった。

ともかくにも、現物を見ないことには何も始まらない。私は初めて加藤の書庫に入った。矢島を除いてはほとんど家族も入ったことがないという書庫は、母屋のなかにある二十畳ほどの書庫と、別棟になっている十畳ほどの書庫とのふたつがあった。蔵書数はおよそ二万冊に達するかと思われた。蔵書の分野は、加藤の関心領域を示していて、ほぼありとあらゆる領域に広がっていた。なお、この時点ではのちに述べる「手稿ノート」は確認できなかった。

二万冊に上る蔵書や資料類を一括寄贈するとなれば、受けいれてくれる可能性のあるところは多くない。加藤が図書館長を務めたことがある東京都立中央図書館、あるいは長く住んだ世田谷区が運営する世田谷文学館、あるいは加藤が関係した大学の図書館などを候補として考えた。東京都立中央図書館については、当時の都知事は石原慎太郎氏であり、とうてい受けいれるはずはないと判断した。世田谷文学館長はフランス文学の菅野昭正氏が務めておられ期待も抱いたが、規模の問題からして無理だろうと断念した。残る候補は大学図書館しかなかったが、どこの大学も財政事情が厳しい。しかも、二万冊の蔵書が

一時に増えるわけで、収納スペースの問題からしても、おいそれと受け入れられないことは容易に理解できた。

そういうなかで、立命館大学を第一候補として考えた。その理由は、第一に、加藤は、立命館大学国際関係学部で、一九八八年から二〇〇〇年にかけて足掛け一三年間、客員教授を務めていたこと、国際平和ミュージアムが設立され、一九九二年から一九九五年のあいだ、その初代館長に就いていたこと、そのふたつのことを考慮したのである。

もうひとつ、立命館大学のある京都といえば、加藤周一『続羊の歌』を読まれた方は御存知だろうが、「京都の庭」という一章があり、これは加藤を理解するうえで非常に重要な章になっている。そこには加藤の京都の文化に対する思いが述べられ、京都に対して特別な愛着を抱いていたことが記される。立命館大学以上に相応しい場所があるとは思われなかった。

加藤の蔵書、資料などを立命館大学に寄贈する交渉を控えて、どのような考え、どのようなイメージをもつか、私なりにまとめておく必要を痛感していた。そのとき参考にしたいと考えたのが、東京女子大学「丸山眞男文庫」であった。そして「丸山眞男文庫」に当初から関与されていた松沢弘陽先生に御相談申し上げた。松沢先生は、もろもろの注意点を話され、『丸山眞男記念比較思想研究センター報告』の創刊号から第五号まですべての号をくださり、これを参考にするようにいわれた。以降、加藤周一文庫を考えるとときには、たえず「丸山眞男文庫」を参考にさせていただき、今日に及んでいる。

吉田図書館長との面談

二〇一〇年六月、矢島の意向を受けて、吉田美喜男立命館大学図書館長（当時、現立命館総長）に相談するために私は京都に赴いた。面談に同席したのは、武山精志図書館次長（当時）であった。吉田館長とも武山次長とも、それ以前には一面識さえなかった。にもかかわらず、おふたりは快くお会いしてくださり、真摯に話を聞いてくださった。

吉田館長も武山次長も、加藤周一に対する評価が高く、加藤の遺した蔵書、資料、手稿ノートが立命館大学に収められれば、それは大学にとって大きな財産になるという認識をもっておられた。

吉田館長からは七点にわたる質問を受けたが、その質問は受けいれる場合を想定しながら、具体的に起こりうる問題点に関する質問であった。質疑応答や意見交換を終えて、吉田館長はいわれた。「結論は図書館だけでは出せません。常任理事会に諮り、大学としての結論を出すので、少し待つてほしい」。要するに、受けいれる提案を常任理事会に諮るということである。そのような前向きな御返事をいただいで、私は東京に戻り矢島に報告した。

結論が出るのは年末になるかもしれないという見通しも吉田館長は述べられたが、朗報は思いがけなく同年九月に届いた。立命館大学は、何らの付帯条件を付けることなく、矢島の意向を尊重し、寄贈を受け入れていただいた。立命館大学の英断がなければ、「加藤周一文庫」はたして存在し得ていただろうか、という思いは今日でも私のなかにある。

同年一二月に吉田館長と武山次長が東京・上野毛の加藤宅に来られ、現物を確認された。そして、同月一三日付けで、加藤の著作権継承者としての矢島翠と、立命館大学図書館長の吉田美喜男氏と、矢島の代理人としての鷺巢力の三者のあいだで、「故加藤周一氏の蔵書寄贈に係る覚書」を締結した。その覚書には、第一に「故加藤周一の蔵書、資料、ノート、書簡類を無償で一括立命館大学に寄贈する」こと。第二に、立命館大学に寄贈された資料、ノート、書簡類の「著作権は著作権継承者に帰属する」こと。第三に、「公開資料は、立命館学園構成員・関係者および一般市民の利用に供する」ことなどが謳われた。覚書の調印者として鷺巢が加わったのも、松沢先生の鷺巢が「代理人になっておく必要がある」という御意見を参考にさせていただき、かつ矢島も松沢先生のお考えに賛成したからである。

その後も今日にいたるまで、吉田美喜男総長には、陰に陽に「加藤周一文庫」に対する御支援をいただいている。

搬出作業と「手稿ノート」の発見

搬出作業は二〇一一年二月に九二日かけて行なわれた。搬出作業には、立命館大学から武山次長が、加藤側からは矢島と鷺巢とが立ち会った。当時の矢島は体調があまり優れずに、搬出作業をずっと立ち会うことは出来ず、すぐに寝室に戻られた。ふたつの書庫、書斎、食堂、玄関先などから次々に蔵書類が運び出された。

ところが、二日目になっても加藤から「書いたものが少しある」と

いわれた、その「書いたもの」が見つからなかった。書庫、書齋、書棚からはあらかたの蔵書や資料類が運び出され、がらんとしてきた。

まだ手つかずの部屋としては納戸として使っていた小さな部屋が玄関わきにあったが、そこには生活用品などがうず高く積まれていた。

まったくの私的空間であり、その部屋に入ることは憚られた。しかし、この部屋が気になって、体調を崩して休んでいた矢島の許可を取って入ることとした。うず高く積まれた生活用品を取り除いても、蔵書や資料類やノートは見つからなかった。

ところが、うず高く積まれた生活用品を取り除くと、この小さな部屋には作りつけの棚がいくつもあることが分かった。床から天井裏まで、かなりの戸棚があったのである。何気なく、ひとつの棚の扉を開けると、なかからは封筒に入った書類やファイルされたままの資料と思しきものがびしりと積み上げられているのが見つかった。その中身を確認して驚いた。それは加藤が遺した「手稿ノート」だったのである。これぞまさしく「書いたものがある」といった、そのものであることは疑いがなかった。しかし、その存在は矢島さえ知らなかった。

武山次長と私は驚き仰天し、今度は各部屋のありとあらゆる棚を片端から開け始めた。天井裏さえも確認した。こうして発見された「手稿ノート」はおびただしい数に上った。

「手稿ノート」の中身にどんなものがあるかを確認する時間的余裕はなかった。探し出された封筒やファイルを、とにかくにも荷造して送り出すのが精いっぱいであった。

搬出にあたっては、蔵書や「手稿ノート」だけではなく、加藤が使っていた机や椅子、そして小さな書棚なども搬出することを考えた。これらは今日、立命館大学図書館内の加藤周一文庫に展示されている。加藤が長年使っていた机や椅子はそれほど立派なものではなかった。机の立派さと仕事の立派さは正比例するわけではないことを、学生や市民にも知ってもらいたかったからである。

二〇一一年二月にあらかたの蔵書や資料類、そして「手稿ノート」を搬出し、立命館大学に送った。しかし、その時点ですべての搬出作業が終わったわけではなかった。多少が残されたままになっていた。ところが、その後、矢島の体調がますます優れなくなり、家探しをするために自宅内に入ることができなくなった。

それから半年後の二〇一一年八月末に矢島は亡くなられた。加藤の著作権は加藤の甥の本村雄一郎氏に引き継がれた。著作権所有者が矢島から本村雄一郎氏に変更になったことを受け、二〇一〇年に締結した「故加藤周一氏の蔵書寄贈に係る覚書」を締結しなおした。新しい覚書は、著作権所有者の本村雄一郎氏、後任の図書館長の和田晴吾氏、本村氏の代理人としての驚巢の三者のあいだで、二〇一一年二月二〇日付けをもって締結された。覚書の内容は一年前のものほとんど変わらないものだった。

矢島が亡くなり、ほどなくして加藤一家と加藤の実妹本村久子氏御一家が長年住みつづけた二世帯住宅が取り壊されることとなった。取り壊される前にもう一度伺って、最後の搬出を行なった。

そのときにフランス政府やイタリア政府から授与された勲章などが戸棚の奥に文字通り「放り込んであった」ために、ほこりにまみれているのを見つけた。実妹本村久子氏に、「この勲章、どうされますか」と尋ねると、久子氏は「私がもらったわけではないし、どうぞもっていらしてください」という御返事だった。有り難く頂戴し、これも立命館大学図書館の貴重書庫に収められている。

フランス留学中に知りあい、のちに加藤と結婚したヒルダ・シュタインメッツから加藤に宛てたおびただしい数の書簡を発見したのもこのときである。

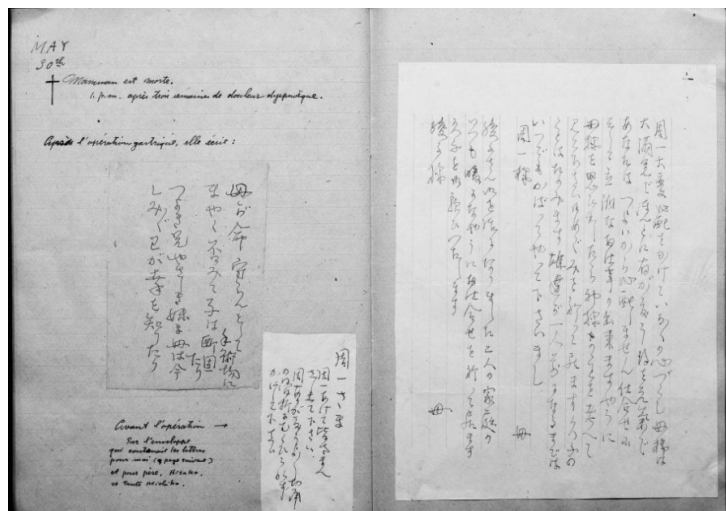
「2」立命館大学図書館が受けいれた蔵書・資料・手稿ノート

整理作業の開始

あらかたの搬入が終わった二〇一一年二月の段階で、立命館大学図書館と加藤の御遺族とのあいだの橋渡し役を務めた私の任務は終わった、と考えていた。ところが、同年三月に武山次長から連絡を受けた。

「蔵書については、図書館スタッフで整理作業を進められるが、「手稿ノート」については図書館スタッフでは整理作業を進めることが困難であり、お手伝いだけできないか」という依頼であった。

「手稿ノート」の発見のときから、この「手稿ノート」の整理作業は時間と費用のかかる作業になるだろう。しかも、加藤の著作について親しんでいないと、とうていできる作業ではないし、「手稿ノート」に



亡くなる直前に母の遺したことば
（《Journal Intime 1948-1949》）

書かれる内容について理解できなければよくすることができない作業だと判断した。もちろん、私ができる作業だとは思わなかったが、さりとて代わりに出来る人のあてがあるわけではなかった。蔵書、資料、「手稿ノート」の受けいれを依頼しておきながら、整理作業の「お手伝い」さえ出来ませんとはいえなかった。

立命館大学図書館は、何をどれほど受け入れたのか。この時点ではまだ十分に明らかではなかったが、のちのデータで確認すると、以下のとおりである。

蔵書（図書） 一七、〇四八冊

蔵書（雑誌） 二、〇三六冊（五〇六タイトル）

冊子型ノート・手帳 八八冊

ファイル 約一、〇〇〇ファイル（主として「手稿ノート」のファイルである）

写真 約二、〇〇〇枚（個人写真から資料用写真まで）

書簡 約一、〇〇〇通

立体物 五五点（賞杯など）

その他（地図・パンフレット） 約一、八〇〇点

こうして二〇一一年四月から整理作業が始まった。整理作業はふたつのグループによって分かれて行なわれ、蔵書類は図書館スタッフによつて進められ、鷺巣と臨時雇いの中野陽子氏が「手稿ノート」のデータベースを作成する作業に携わった。

蔵書の特徴

蔵書のありようは、その持ち主の関心領域を示すだけではなく、当人の研究方法をも示すものだろう。加藤の蔵書のありようはいくつ

かの特徴があった。

第一に、集められている蔵書の領域は、日本文学史関係や日本美術史関係はいうまでもなく、フランス文学、フランス思想、日本思想史、日本仏教史、神学論や宇宙論、映画論や演劇論、そして日本経済史関係、中国経済など、ほぼありとあらゆる領域に拡がっていることであつ



加藤文庫入口

た。

ことに日本仏教史関係の蔵書と経済関係の蔵書、資料類が思いのほか目立った。仏教史関係では、明治大正時代に刊行された『弘法大師全集』や『慈眼大師全集』や『法然上人全集』、あるいは一休宗純関連の古書籍、戦前および戦後に刊行された『五山文学全集』『新五山文学全集』など、多くの仏教史関係の書籍を所有していたことを知った。

また加藤はしばしば国際問題を論じたが、そういう場合には、まず経済的背景を押さえるのを常とする。『日本文学史序説』(筑摩書房、上巻は一九七五、下巻は一九八〇)各章の冒頭は、必ずその時代の社会的経済的背景について述べる。

一九六八年の事実上ソ連軍による「ブラハ侵攻」が起きたとき、加藤の代表作のひとつである「言葉と戦車」(『世界』一九六八年一月号、『加藤周一選集4』所収)が著わされたが、執筆のためのノート『1968 1969』(二〇一八年公開予定)にも、当時のチェコスロヴァキアの経済状況を記している。経済関係書が多い所以である。

マルクス・エンゲルスも、加藤には珍しく書き込みをしながら、独語版で読んでいた。加藤がマルクス・エンゲルスを読んでいることを確認したとき、丸山眞男が「加藤君は、マルクス主義をくぐり抜けている」と表現したことを思い出した。

第二に、ほぼ森羅万象にわたるほどの広い領域に関心を示しながら、蔵書数はおよそ二万冊であり、学者としてはそれほど多い蔵書数とはいえない。それにはいくつかの理由があるだろう。

まず加藤は日本の大学に正教員として籍を置いたことがほとんどない。したがって、大学内に研究室を与えられ、そこに蔵書を置くことはできなかった。基本的には自宅の書庫に収めるしかなかったのである。いきおい蔵書数は制限せざるを得ない。実際、加藤は「総量規制」している、といっていた。終わった仕事の文献は、廃棄し、売却もしていた。

二〇を数える海外の大学で教鞭を執ったが、長期にわたって籍を置いたのはカナダのブリティッシュ・コロンビア大学(UBC、一九六〇―一九六九)だけである。あとはベルリン自由大学(一九六九―一九七三)にしても、イエール大学(一九七四―一九七六)にしても、長期にわたって籍を置いてはいない。しかも、海外の大学に赴任するたびに、蔵書をもち歩くことは出来ない。その大学の図書館がもつ蔵書を基本文献として利用することになる。

ブリティッシュ・コロンビア大学でも、イエール大学でも、加藤は「文献には不自由しなかった」といっていた。それは文献が豊富に用意されていたことを意味するだろうが、好きなように購入できたこともあったに違いない。

もうひとつの理由は加藤の方法と深く関係するが、ことに加藤の日本文学史研究や日本美術史研究は、他の研究者の研究書に言及されることが多くはない。あくまでも加藤が「原典」や「原作品」をいかに読んだかが中心に論じられる。したがって、他の研究者の研究書をそれほど多く所有していないのである。

ファイリングされた手稿ノート

「手稿ノート」については、冊子型ノートが四〇冊ほど、残りはルーズリーフ型ノートである。その大半は加藤によってファイリングされ、それぞれに名称がつけられている。たとえば「日本文学史古代」とか「日本文学史中世」とか。ひとつのファイルには、数頁から数十頁が収められている。

ファイル数は六〇〇を超える。さらに未整理のままに遺されたルーズリーフがあり、これは加藤周一文庫スタッフの手で仮の名称をつけてファイリングし（亀甲パーレンをつけて区別した）、その数は四〇〇に及ぶ。

何故加藤はルーズリーフ型ノートを採用したのだろうか。おそらく冊子型ノートだと後日に追加しにくいのが、ルーズリーフ型ノートだと、あとからの加減が容易である。差し替えや追加が自由に出来るのがルーズリーフ型ノートの利点だろう。しかし、何時書いたかが確定できないという欠点も生じ、実際、同じファイルに収められる手稿ノートでも、書かれた時代が異なるものが混在している。これら一枚一枚が書かれた時代を特定することはきわめて困難である。

もうひとつの問題は用紙にある。上質紙を使っていればともかくも、一九六〇年代にはいわゆる「わら半紙」が普通のことであった。しかも、加藤がインクを使って書く文字は小さく、経年変化で文字が滲んでいる。解読するのが難しい場合もある。

なお、冊子型ノートではないが、年次手帳が四〇冊以上、一九五〇年代のものが数冊、一九六七年から二〇〇八年までは一年も欠けるこ

となく完全に遺っている。これらを繰れば、この間に加藤がとった行動のあらかたは判明するだろう。

来信類

二〇一八年二月現在、来信類までは整理が進んでおらず、その数がどれほどあるか正確にはつかめていない。なかには加藤が出した書簡があり、本村雄一郎氏はじめ加藤の家族や知人たちから御寄贈いただいた書簡もある。

書簡の大半は外国人からの来信であり、それらはタイプの場合ならともかくも、直筆の場合は解読することさえむづかしい。そもそもサインが読めない。したがって、誰から来た書簡かさえも確定ができない。われわれは「サイン帳」をつくり、このサインは誰々だろうと、サイン帳を見ながら差出人を確定していかないとならない。

写真

その他には写真がある。生後百日のときの写真から晩年にいたるまでの写真がかなりの数に上る。大学の卒業写真集もあり、加藤は東京帝国大学の医学部内科教室を一九四三年九月に繰り上げ卒業しているが、その直前に撮影したと思われる記念写真も遺っている。内科教室の写真は、加藤以外のすべての学生が角帽をかぶっているが、ひとり加藤だけが無帽で、いちばん後ろで不貞腐れた表情をしている。加藤は孤独を生きた人だが、その写真は加藤の学科内での位置を象徴して

いるように思える。

それに輪をかけているのが中学校の卒業写真集である。卒業写真集を加藤は遺していないので、国会図書館で確認したのだが、東京府立第一中学校、今の東京都立日比谷高校の卒業写真集のどこをみても加藤は写っていない。集合写真で撮影時にいなかった人の顔は丸窓で脇に載せることが多い。だが、それさえもない。おそらく卒業写真集に自分の顔が載ることさえ拒んだのではなからうか。

それだけではない。一中には『学友会雑誌』という校内誌があり、これには丸山眞男も、隅谷三喜男も、水田洋も文章を寄せている。ところが、加藤の文章は一度も載っていない。

要するに、校内雑誌にも寄稿しない。卒業写真の撮影も拒む。いかに中学校のときに孤独と疎外を味わっていたかがうかがい知れる。加藤はその後『羊の歌』で、中学時代を「空白の五年」と表現した。

地図と年表

資料類のなかで特徴的なことは、地図帳が二百数十あることである。外国の都市を訪れると、そこで地図を購入する習慣があったのだろう。初めて訪れた都市ならば、誰しも地図を必要とする。ところが、加藤はパリの都市図さえいくつももっている。一九五一年から一九五五年までの三年余り、パリに留学していた加藤は、地図を見なくても市内を移動できるほどに知っていたはずである。にもかかわらず、パリの地図帳をいくつも購入している。それは何故だろうか。おそらく移動

するために購入したのではない。第一に、地図帳は都市を全体的に把握する手段だったに違いない。そして過去に購入した地図帳と新たに購入した地図帳における「変化と持続」を確認していたのだろうと推測する。ここにも、対象を全体的に把握する方法が貫かれ、たえず「変化と持続」を確認する方法が採られている。

地図は市販されているものを購入しているが、自らつくったものに「年表」がある。加藤の「手稿ノート」のなかには、手書きによる年表がたくさん含まれている。

なぜ「年表」を自らつくったのか。これもまた時代を概観し、俯瞰する方法に基づくと思われる。誰と誰とが同時代人であり、どういう時代を生きていたかなどは、もちろん年表を繰ればわかることであるが、自らつくれば、自分の考え方に基づいた年表が一目瞭然になって目の前に現われることになる。その意味では「年表」も「地図」と同じく、加藤の方法となっているものである。時間と空間とを意識していたこともうかがえる。

〔3〕「加藤周一文庫」の方針

蔵書の三グループ

蔵書、資料、「手稿ノート」の整理作業が始まったが、どのような方針で整理作業を進めるかについての指針は示されていなかった。それでは作業を進められない。そこで図書館の最高責任者であった渡辺公

[illegible]

三副総長(当時)に相談に行った。渡辺副総長とは当時一面識もなかったが、図書館の最高責任者に就いておられたことと、たまたま学内で挨拶を交わしたことがあり、それを頼りに面談を求めたのである。

渡辺副総長は理解が早く、かつ結論と実行には慎重であったが、「活きた文庫」をつくろう、という点で意見が一致した。「これまで多くの大学の個人文庫は、保存されるだけのことが多く、必ずしも活用されていない。活用される文庫をつくらなければ、大学に文庫を置く意味が少ない」といわれた。「活用される文庫」とするには、資料がそろって、使い勝手が良い条件を整えることが必要である、と私は考えて、そのことを渡辺副総長に伝え、賛同をいただいた。以後、渡辺副総長のこの方針は、「加藤周一文庫」の基本方針のひとつとなったのである。

前節に述べたような蔵書、資料、「手稿ノート」を、どのような方針で、どのように公開していくか、という具体的な問題が生じた。もともとは矢島の希望であった「一括保存」し、「市民にも公開」することを目指している。ところが、図書館の蔵書の「保存と公開」とはほぼ二律背反の作業である。「保存」に力点を置けば「公開」は制限を設けざるを得ない。「公開」を重視すれば「保存」には多少目をつぶらないとならない。「保存と公開」をどのように折り合いをつけるかという、どこの図書館も悩む問題に直面したのである。

加藤の蔵書、資料、「手稿ノート」の受け入れを打診していたとき、これは僥倖としかいいようがないことなのだが、立命館大学では新し



加藤周一文庫の開架式書庫

い図書館建設計画が進んでいた。かくして新図書館のなかに「白川静文庫」と「加藤周一文庫」とを一室に設けるという構想が組みこまれた。いわば白川と加藤の〈ルームシェアリング〉である。

そして学生・教員・職員など立命館大学関係者だけではなく、広く市民にも直接加藤が遺した蔵書などに触れられる機会をつくること

可能となった。すなわち蔵書の大半を開架式書架に配架し（約一万二千冊）、その一部については貸し出しも行なうことができる道筋がついたのである。

しかし、すべての蔵書を開架式に配架することはむづかしい。東京女子大学の「丸山眞男文庫」の例を参考にしながら、①加藤の書きこみが一行でもあり、付箋などがひとつもついているものは、開架式には配架しない。②古い、あるいは貴重な文献で、損傷したり紛失したりしたら二度と入手が困難な蔵書も開架式には配架しない。③著者による献辞が書かれた寄贈本は開架式には配架しない。しかし、この三原則を実行すると、重要な蔵書ほど開架式には配架されない結果となる。致し方ないとはいえ、内心忤怩たるものがないわけではなかった。

とにもかくにも、以上の原則のもとに蔵書を分類していった。そして蔵書類を三種に区別し、分けて配架した。その第一は、加藤の著作である。その第二は、加藤について書かれた書籍雑誌である。そして第三には、加藤が所蔵した文献である。

第一の加藤の著作は、加藤が必ずしも自著作の保存に積極的だったわけではないこともあり、欠けているものが少なくない。それはとりわけ初期の著作、ことに戦時中から敗戦直後に書かれた雑誌や同人誌に書かれた著作がない。これらも集める必要があると判断した。所蔵される著作は利用者の便宜を考慮して発表年代順に配架することとした。

第二の加藤論に関しては、加藤は他人が自分の仕事について何をいったかについて、それほどの関心がなかった。したがって、加藤論も意識的に集められた痕跡は見えない。というよりもほとんど集められていない。しかし、加藤研究という観点からすれば、加藤に対する論評が集められていることは不可欠であろう。これも発表年代順に配架することとした。

第三の参考文献については、これを増やしたり、減らしたりすることは出来ない。原則にのっとり、ある文献は開架式に、ある文献は閉架式に配架する。参考文献に関しては十進分類法によって整理し、配架した。

『校友会雑誌』と『しらゆふ』

加藤が所蔵しなかった自著作が収載される雑誌や同人誌があり、これまででも収集してきた。たとえば第一高等学校時代の『校友会雑誌』もそのひとつである。同誌には「正月」（一九三八年二月、「加藤周一自選集1」所収）、「従兄弟たち」（一九三八年六月、単行本未収録）、「秋の人々」（一九三八年十一月、単行本未収録）を寄稿しているが、これらの雑誌も加藤周一文庫に収められた。

また「昭和十五年会」という東京帝国大学医学部の学生たちが編集したと思われる同人誌があり、その名を『しらゆふ』という。加藤はこの『しらゆふ』に「倦怠について」（一九四〇年、創刊号）、「嘗て一冊の『金槐集』餘白に」（一九四一年、第二号）、「頌」（一九四二年、第三

なかでも「嘗て一冊の『金槐集』餘白に」に注目する。加藤は戦時下から敗戦直後までに少なくとも三回にわたって『金槐集』について原稿を残したことを確認している。一回は「青春ノート」（ウェブ公開済み）であり、一回は『しらゆふ』（一九四一年）であり、一回は『世代』（一九四七年一月号、『一九四六 文学的考察』所収）である。

「手稿ノート」のデジタルアーカイブ化

加藤周一文庫は、蔵書と並んで大量の「手稿ノート」を所蔵する。総頁にして一万頁を超える。これをどのように「公開」するか。もちろん現物は、保存上の理由によって、公開することはできない。

一九四一年十二月八日

Enfin la guerre. enfin c'est nous. ^{fais} ~~déclaration de la guerre~~

de notre gouvernement. Qui a fait? et pourquoi?

大層な朝大学の東門に集つた所だ。歴史を論じ合ふやうくやつた向
丁般振が様々のあとで、平衛子に手をつけなばう。(医學生の愛憎と云々)
^{へち}當まゝりまた屠殺、かういふ結果預けた所で死守するもの習士の序懐でつかぬ。
やりまわうことと^{さき}先ず、その敵様の田圃を掘らして論じはせぬ。留守がそれと
題にする。街には千石の上前に、人が集つて、ニコスとまゐつてゐる。●丁度相模
の放送とよく人の群のやうに。しかとあるやも落着いた。静かまで。
最も静かなものは空である。今日、^{冬也}雪雲高く、^{天候}寒風吹く、冷たく、澄ん
どろ。雪水のやうに、静かに。宝ルベク又の聖なる静寂と思はせる。

Un ciel est par-dessus les faïcs. — Un horizon sans fin et un air bleu —
海邊の空—— Toutes closes, autour de moi, étaient rimples
et pures : le ciel, la neige, l'eau. 〇やうに、visions de clarté
よまた佳境、西の方、工場の煙突の上に、折から雪やうといふ塵土の空に見え。

「青春ノートⅧ」の1941年12月8日の項

そこで参考にしたのが丸山眞男文庫の「草稿類デジタルアーカイブ」であった。「手稿ノート」のすべてをデジタルアーカイヴ化すること
は困難にせよ、加藤周一研究にとつて、重要と思われる「手稿ノート」
について、デジタルアーカイヴ化することを考えた。これはもちろん、
渡辺副総長にも進言し、武山図書館次長にも提案した。かくして「手

稿ノート」のデジタルアーカイブ化作業が始まった。

そして二〇一六年四月に新しい図書館「平井嘉一郎記念図書館」が開館し、それと合わせて「加藤周一文庫」が創設されたが、そのときに何らかのデジタルアーカイブを公開することを図書館から求められた。

そこで選んだのが「手稿ノート」のなかで、独立性が高い八冊の「青春ノート」と名づけたノート類であった。これは一九三七年から一九四二年にかけて、すなわちおそろく一七歳から二二歳にかけて書きつけられた冊子型ノートである。順不同に、小説、詩歌、日記、評論などが綴られていた。

八冊のノートを繰っていくと、加藤の関心が創作から評論へと移っていくことも分かる。時代は戦争色が次第に濃くなるときに、加藤がいかに反応していたかも読みとれば、当時の加藤がどのような読書生活を送っていたかも知ることができる。最初にデジタルアーカイブ化するにふさわしいノート類と判断した。なお、この八冊は『青春ノート（抄録）』として二〇一八年秋には人文書院から刊行される予定である。

デジタルアーカイブ化作業を始めるにあたって、丸山眞男文庫の「草稿類デジタルアーカイブ」を参考にしたことは右に述べたが、デジタルアーカイブの将来を見越せば、資料のデジタルアーカイブ化は今後とも拡大し、たんに映像でも読むことができるという条件だけでは不十分になる日が早晚来るであろう。そのためには「手稿ノート」

を映像で読むことができるだけにとどまらず、「キーワード」「頻出キーワード」で検索できるようにシステム構築する必要があるだろうと判断した。こうして時間と資金が多大に必要になり、その調達が大きな問題であることは承知しつつも、次代のデジタルアーカイブの標準を念頭に置きながら、作業を始めたのである。

この頃に加藤文庫作業チームは当初から大きく変わってきて、当初からのメンバーだった中野陽子氏や富山仁貴氏（関西学院大学、近代日本史専攻）は、それぞれ個人的な理由によって作業チームから離れた。あらたに猪原透氏（近代日本史専攻）、西澤忠志氏（音楽批評論専攻）、そして半田侑子氏（フランス文学、加藤周一論専攻）によって担われていた。のちに福井優氏（戦後日本思想史専攻）も加わるが、彼らの献身的な作業があったからこそ、デジタルアーカイブ化作業を進めることができ、二〇一六年五月の公開にまで漕ぎつけたのである。

その後も「手稿ノート」のデジタルアーカイブ化を進めており、すでに『Journal Intime 1948-1949』『Journal Intime 1950-1951』を二〇一七年に公開した。今後も順次、デジタル化が完了したところから公開する予定である。

なお、加藤周一文庫が作成する「手稿ノート」のデジタルアーカイブは左のURLで図書館のサイトから「加藤周一文庫」にアクセスし、閲覧することができる。

(<http://www.ritsumei.ac.jp/library/collection/collection13.html/>)

文庫活動と研究活動

加藤周一文庫の作業を始めて二年が経った頃である。私はほぼ毎週一週間余りを京都に滞在し、図書館内で「手稿ノート」を中心に整理作業を進めていた。その間に作業になんらか関わりをもつのは、数名の図書館スタッフと臨時雇いの中野陽子氏と富山仁貴氏であった。立命館大学の正規の教員は誰も関与していなかった。しかも作業は相当の長期間に及ぶことは明らかであった。

にもかかわらず、東京から来て整理作業を進めている人物がいかなる人物であるかも、加藤周一文庫がいかなる作業をしているかも、学内にさえ知られず、しかも研究とは無関係に作業が進んでいる。そのことに、私は危機感を覚えた。このままでは学内世論は加藤文庫の作業に否定的になるに違いない。そこで渡辺副総長に再び面談を求めた。加藤文庫の作業の現状と、将来の問題点、そして大学である以上、加藤周一文庫を基盤として加藤周一研究を進めるべきだと訴えた。二〇一三年七月のことであった。

それから半年余りが経って、二〇一三年一〇月末に渡辺副総長とふたたび面談し、今後の加藤周一文庫について、意見交換を行なった。渡辺副総長は、研究会を組織することを提案し、研究会メンバー候補を数名挙げられた。同時に、科研費を申請することを求められた。しかも学内の締め切りはすでに過ぎているが、何とか押し込めるから、数日内に科研費申請を提出することという要求であった。

私は面食らった。科研費申請などこれまで一度たりともしたことが

ない。何をどのように書くのか、書類作成にあたっての勘所はどのようなか、など実際的なことがいかにもく分らない。しかも学内の締め切り期限はとうに過ぎていているが、数日内で申請書類を作成せよというのである。

しかし、図書館の整理作業と加藤周一文庫を基盤にした研究とは「クルマの両輪であり、どちらが欠けても成り立たない」という主張をしたのは私であり、無理は承知の上で引き受けざるを得ないと判断した。それから私は他の作業は脇に置き、数日で科研費基盤研究（C）の書類作成を完成させたが、幸いにも二〇一四年四月に科研費基盤研究（C）が採択された。加藤周一文庫の整理作業の一部は、科研費からも出金が可能になった。

一方、渡辺副総長は立命館大学衣笠総合研究機構のなかに「加藤周一現代思想研究センター」を設立することを提案してくださった。こうして二〇一五年四月には、「加藤周一現代思想研究センター」が設立される運びとなった。

これによって、文庫整理作業と文庫を基盤とした研究活動とが、曲がりなりにも両立した形になり、その後はこの形を基本にして進むことになった。

二〇一六年にふたたび申請した科研費基盤研究（B）（二〇一七年度から二〇一九年度）も幸いに採択された結果を受けて、これも研究および整理作業の資金の一部としている。科研費申請については、松沢弘陽先生に御相談申し上げ、松沢先生は、丸山眞男記念比較思想研究セ

ンターが申請した書類の閲覧を許してください。

どこの大学でも同じ状況にあるのだろうか、研究資金や活動資金を外部から調達することが求められる。それが出来なければ、文庫の整理作業も加藤周一研究も進められない。

著作権所有者の本村雄一郎氏は毎年発生する加藤の著作にかかわる印税について、その二分の一を「九条の会」に、その二分の一を「加藤周一文庫」に寄贈されている。それは貴重な資金源となっている。しかし、それだけでは足りない。さらに今後は広く市民からの「寄付金制度」なども構築しないと、文庫運営も研究活動も進められなくなる可能性さえ感じている。

そして同じような境遇にある個人文庫の提携が不可欠の作業であるように思う。そういう観点からいえば、東京女子大学の丸山眞男記念比較思想研究センターと立命館大学の加藤周一現代思想研究センターとのあいだで、研究にかかわる提携の協定が結べたことは、将来に向けて心強い限りである。

時代は大きな転換点に差しかかっている。加藤は戦前から敗戦直後にかけて自ら観察した「戦争体験」を踏まえて、「日本人のものの考え方とは何か」を明らかにしようと努めた。そういう点では丸山の日本政治思想史研究と響きあう部分をもっているのではあるまいか。加藤の名著である『日本文学史序説』が広義の文学概念を採用しほぼ精神史に近くなっていることも、「形とは外在化された精神である」という基本的な捉え方に基づく日本美術史研究も、加藤の基本的な問題意識

と結びついている。「加藤周一文庫」は、加藤の基本的な視座と加藤の方法とを体現したものであり、時代に対する小さな拠点となることを願っている。

この間に加藤周一文庫は、松沢弘陽先生をはじめ東京女子大学丸山眞男記念比較思想研究センターの諸先生方、立命館大学の渡辺公三副総長はじめ諸先生方に御助言いただき、御意見をたまわった。それらがなければ、とうていここまでさえも来られなかったことは間違いがない。